

令和三年度版

自令和三年四月
至令和四年三月

会報

第三十九号

俳人協会宮城県支部

一 令和三年度回顧

支部長 小林 里子

令和三年度は、新型コロナウイルスのパンデミックから三年、ワクチン接種は進みましたが新たなオミクロン株の発生により感染者が増える等、依然として収束の見通しの立たない状況が続き、支部にとって試行錯誤の一年となりました。その中で役員改選期を迎え、幹事の交替はありましたが、顧問を始め前役員が引き続き支部運営に当たることとなり、支部長として三期目をスタート致しました。

令和三年度の事業計画は、繰り返し発令される緊急事態宣言等により、変更を余儀なくされる事態となりましたが、(公社)俳人協会より本部選者の派遣と賞品の授与等のご支援を戴き、滞りなく実施することが出来ましたこと御礼申し上げます。

五月の総会は、緊急事態宣言下にある為開催を中止とし、俳句会のみ「通信互選俳句会」として実施することとし、本部選者守屋明俊先生の御選と高評を戴きました。総会議案一切は、通信による支部役員会を以って原案通り議決致しました。

九月の俳句研修会は、当初開催を予定していましたが、東京オリピック開催後の新型コロナウイルス感染者の増大により已む無く中止とし、「通信俳句会」のみ実施致しました。本部講師守屋明俊先生のご講演については、誌上講演として本会報の特別企画欄に掲載させて頂くこととし、御選と高評を戴きました。

令和四年一月の新春賀詞交換会は、十一月に発生したオミクロン株によるコロナ禍の為、「通信互選俳句会」のみの実施とし、本部選者藤田直子先生より御選と高評を戴きました。更に、藤田先生には特別企画欄へのご寄稿をお願いしました処、ご快諾を戴き、師である鍵和田柚子先生の俳句の真髓を伝える玉稿を賜りました。改めて守屋先生、藤田先生には、宮城県支部へのご理解とご支援を賜りましたこと深謝申し上げます。

この様な支部運営の続く中、浅川芳直氏が俳誌「むじな」の発行

等による活躍により、令和三年度宮城県芸術選奨新人賞(文芸)を受賞されました。支部にとつても慶事であり、祝意を表します。

支部長として三期目の令和三年度に続く令和四年度は、宮城県支部として重要な事業を遂行する時期を迎えます。一つは令和四年九月の「第三十三回東北俳句大会・宮城大会」の開催の主管を務めること。いま一つは、令和五年五月を迎える俳人協会宮城県支部創立四十周年の記念事業です。前者については、当初前回大会と同じ参加方式での開催を準備しておりましたが、新型コロナウイルスの感染拡大に加え、支部会員の高齢化の現状に鑑み、俳人協会のご了承のもと紙上俳句大会として実施することとし、「一人でも多く、一句でも多く」を目標に大会成功に向けて着手致しました。後者については、「創立四十周年記念誌」の刊行と令和五年五月二十八日(日)の総会時に記念行事の実施に向け、計画を進めております。

次に令和三年度を顧みますと、盛夏にコロナ禍の為、無観客で開催された東京オリピック、パラリンピック、十月には第百代首相に岸田文雄氏が就任、同じく十月に日本出身で米国籍の真鍋叔郎氏のノーベル物理学賞授与の快挙がありました。その一方で全国各地で頻発する地震の被害や豪雨による土石流災害等が続き、自然災害の脅威に晒された一年でした。加えて年度末の三月十六日には東日本大震災の「余震の余震」と云われる福島県沖を震源とする地震に見舞われました。更には北京冬季オリンピック直後の二月二十四日ロシアがウクライナに軍事侵攻を開始し、今や世界は分断の危機にあります。そして新型コロナウイルス感染者数は、現在世界で五億人を超え日本でも八百万人を超えています。今後も続くと考えられる新型コロナウイルスの感染状況に鑑み、会員の安全を最優先に支部運営に努め、支部創立四十周年の慶事を迎えたいと思っております。

会員の皆様には更なるご理解とご協力をお願い申し上げます。最後となりましたが、支部創立時よりの会員で長く副支部長を務められ、支部の発展に寄与されました石崎径子氏が、令和四年二月十三日にご逝去されました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

一 令和三年度俳人協会宮城県支部総会

通信互選俳句会
参加者 一〇三名

令和三年五月の支部総会は新型コロナウイルス感染症拡大により宮城県は緊急事態宣言が発令されていることから、総会・講演会・懇親会はやむなく中止となった。総会議案一切は、文書にて役員会に諮られた上、原案通り決議いたしました。また、例年総会の席上で実施してきた米寿の方へのお祝い及び役員勤続十年感謝状の贈呈は別途行った。

句会は、本部より守屋明俊評議員を選者に派遣していただき、通信互選俳句会というかたちで実施された。なお、守屋先生には選の他、特選句・秀逸句の選評をいただいた。

決議事項

- 1 令和二年度事業報告
- 2 令和二年度収支決算報告
- 3 令和二年度監査報告
- 4 令和三年度事業計画
- 5 令和三年度収支予算
- 6 令和三年度・四年度宮城県支部役員

入選句

特選

一服に畔焼く端の火をもらふ
かげろふは海の碑三月来

秀逸

魯迅碑の不戦の太字桃の花
夜空にも沖のあるはずちやんちやんこ
蜜蜂を喜ばせたる献花かな
黙禱の沖へ一羽の青鷹

本部選者 守屋明俊選

柏木ともみ
諸岡孝子
坂内佳禰
岡本幸治
渡辺通子
高宮義治
佐野久乃

道産子の馬柵の続きを耕せり
入選

草萌や立てば歩めのフェルト靴
雛飾る老の館の賑はしく
牛の顔のけつつ解く雪囲
十年てふ祈りの嵩や春田打
御持たせの菓子のもも色あたたかし
老猫の寝息たしかむ春の闇
慰霊碑に跳ねて風船青空へ
遅刻児の背を押してゐる揚雲雀
飛ぶちから秘めたんぼの丸き絮
お地藏に汲み立ての水土の春
〔互選高得点句〕（五点以上、入選句を除く）
白魚のひしめく目玉売られけり
式場を四角に歩き卒業す
柔らかき馬のたてがみ風光る
自転する大地よ海よ鳥帰る
凍て解くる畝の配置を囀におこし
蒼天の深みに浮かぶ花辛夷
海へ打つ慰霊の太鼓春寒し
春霞見知らぬ街へ来たやうな

木村螢雪子
高木秀二
土井澄子
木村螢雪子
佐藤綾泉
藤田ユウ
柴田和枝
佐々木潤子
伊藤一男
山田史子
篠沢亜月
高宮義治
澁谷としの
田村恵子
石川喜美子
大沼せつ子
木村裕一
相内をさむ
針金聖子

三 令和三年度俳人協会宮城県支部俳句研修会

通信句会
参加者 七十一名

九月十八日開催予定の俳句研修会は、新型コロナウイルス感染症が深刻な状況にあることから、急遽講演会と懇親会を中止し、俳句会のみ通信句会に変更して行われた。研修会では、投句者の互選は行わず、本部講師の守屋明俊評議員に選句および特選句・秀逸句の選評を依頼した。また、当日講演予定だった講演内容は特別企画欄に掲載させていただくこととなった。

入選句

本部選者 守屋明俊選

特選

絵心経読み解くことを盆休み
青葦の切つ先さやに日を止む
秋立つや笠郎女真野の原
秀逸

大沼 せつ子
堀之内 久子
幾世橋 廣

宇野千代の汗のハンカチすぐ乾く
札拜堂灯し夜学の始業ベル
杉山の襷にけぶれる懸り藤
牛馬になりて際やか我がなすび
天窓の光秋めき土を練る
入選

熊沢 れい子
柏原 眠雨
八巻 義枝
佐野 享保
木村 裕一

震災を越え来し雄勝硯洗ふ
太白山に白き雲湧く秋始め
松島の島々けぶる夕立かな
鳴き砂を鳴かす児の足雲の峰
父焚きし痕に門火を焚きにけり
渡舟呼ぶ鈴の涼しき浦戸島
海の風金魚ねぶたの尾を揺らす
初嵐賽の河原の石崩す
鴨涼し雄島の磯馴れ松の下
冷房を肌へにエジプト木乃伊展

富田 洋子
屋代 ひろ子
本田 幸逸
伊藤 一男
鈴木 勝也
富田 洋子
屋代 ひろ子
篠沢 亜月
本田 幸逸
八巻 義枝

四 令和三年度

俳人協会宮城県支部新春賀詞交換会

通信互選句会
参加者 九十一名

新春賀詞交換会も、新型コロナウイルス感染収束の見通しが困難
なため、講演会と懇親会は中止し、俳句会のみ通信互選俳句会とし
て行われた。本部選者は、藤田直子評議員。藤田先生には、選と共

に特選句・秀逸句の選評を依頼した。また、特別企画欄にご寄稿い
ただいた。

特選

村ひとつ夕日の色や干菜吊る
吉祥天の朱唇にふるる牡丹雪
初春の湾に憩へる島と島
秀逸

本部選者 藤田直子選

畑日誌果つ鎌の傷鉄の傷
人形にしまふ人形久女の忌
海へ向く祈る形の冬木の芽
百頭の牛の咀嚼や日脚伸ぶ
川底の太古の地層初日射す
入選

大沼 せつ子
屋代 ひろ子
佐藤 綾泉
柏木 ともみ
川原 友記子

菜屑焚く煙ひとすぢ島小春
牧水の空となりたる白鳥来
リハビリの部屋に聖樹の点滅す
霜月の夜の風を聞くどんこ汁
歴代のボンボニエール展菊旺ん
いつまでも海をみてゐる日向ぼこ
秋まつり白二十個の杵の音
牡蠣積みみて船足遅き入江かな
日の端に雀来てゐる翁の日
切岸の懸崖となり菊薫る
〔互選高得点句〕(五点以上、入選句を除く)
少年の父の海継ぐ鮪船
弓袋の改札を行く三日かな
冬麗や鳶の輪に入る昼の月
うす紅の仮名料紙選る筆はじめ
初風呂や嬰兒のやはき脇の下
海光の真上に牡蠣を引き揚げる
あたらしき手帳のかたし二日かな

佐野 久乃
小野寺 みち子
佐々木 潤子
木村 裕一
八巻 義枝
高平 悦子
澁谷 としの
本田 幸逸
小林 里子
笠原 等

鈴木 わかば
幸野 秀峰
高木 洋子
富田 健子
高橋 健一
木村 裕一
藤村 裕一

五 宮城県支部会員作品集

古絵図のままの村落朴の花
道訪へば春泥に描く案内地図
気晴らしに少し派手目の日傘買ふ
葉あるページ虚子の句虚子忌かな
炊き出しの俄天暮春時雨
十号車は女性専用更衣
初雪のこぼれくる夜の広さかな
荒星に流るる星の幾筋か
春嶺を遠に絡繰躍り出す
お不動の金の剥落春ともし
予備マスク足して合切袋かな
干物を畳む袖より冬の蜂
夫の忌の夕べ乱鶯高鳴ける
夢でなき宇宙への流星月夜
虎落笛天狗に声のあるとせば
旧姓の残るものさし竹の春
古書肆の煙草のほひ走り梅雨
無人駅天狼青き月忌月
稲の花朝靄つつも耶蘇の里
紙漉の手に届く朝日かな
稲刈の輪つばに詰めし昼餉かな
雪の夜はただしんしんとしんしんと
早春の屋上建設吹流し
屋上の人と重機と春日中
籠り居の足元に寄る秋日かな
積み上げし嵩柔らかき秋草刈

相内 をさむ
青木 紀予子
明石 峰雄
浅川 芳直
安達 朝子
阿部 竹子
石垣 弘子
石垣 真理子
石川 喜美子
石川 千代子
石川 ミヨシ
石崎 寿美子
石崎 径子

ふる里の十月の山そして川
長居して麦茶出さるる古本屋
竹伐りて一気に空の近くなり
山眠る軒に積まれし櫓の山
新地図に津波の記号小鳥来る
星涼し縄文土器に補修孔
笑む首を差して仕上がる内裏籬
春蟬の樹下に栗駒御神木
雪まろげ引き分けとなるチャイムかな
裸木となり人間にちかづきぬ
桑枯れて伊具の丸森風ばかり
神名備の青麻の山に冬の虹
東京へ帰る子釣瓶落しかな
冬隣世界津波の日の祈り
チヨーク絵を背に卒業写真撮る
岩塩の舐め跡著き大暑かな
花の雨ワクチン接種の予約券
豆ごはん雨となりたる日曜日
夢に出づるティラノサウルス軒垂氷
姫ほそと謡ふ田歌に夕蛙
来る人も息白くして朝の門
望の月籬の島に波の音
ミサ堂に銃の痕跡冬ざるる
春待つやリボンはみ出す帽子箱
国後を隠す霧笛の鳴るばかり
赴任地は雪竿のみを頼りとす
原発の避難道路図そぞろ寒
がやがやと一人静を見つめ合ふ

板橋 清夫
一条 孝子
伊藤 一男
井場 敏子
上原 若子
江戸 裕子
遠藤 克子
及川 奈奈夫
大泉 元子
大江 一葦
大倉 由美子
大友 まり子
大沼 せつ子
岡本 幸治

一位の実古文書を読み今を知る
 稲架を組み良き風となる夕べかな
 ひとり旅車窓にもをり春の蠅
 春雪や刻印深き地震の浜
 星飛ぶや絵本の城の立ち上がる
 紐引いて点す書齋や憂国忌
 浚雪の濁る川波春一番
 神籬の月次霊祭夢二の忌
 千年の壺の碑春立ちて
 風花の飛び来る空の青さかな
 柳行李の角のほつれや更衣
 吹きこぼすだて正夢の十夜粥
 吊り上ぐるピアノに夏の蝶とまる
 十二階の窓あけておく良夜かな
 ステテコの父に教はる植木算
 花時計に花足してをり鳥渡る
 杉玉を吊す居酒屋隙間風
 反戦歌に若き思ひ出柳絮舞ふ
 掃き下す磴百段や年用意
 さざ波に火影の揺るる夜の秋
 ドクターへり降りる屋上花の冷
 ベランダの滴ふくらむ凍大根
 梅雨深し峠の茶屋の常夜燈
 失明の犬の駆け出す花野かな
 森の奥森の声なる青葉木菟
 吊橋の隙間の奈落花は葉に
 震災十年亡き叔父の庭梅匂ふ
 冬満月口マンを語る夫と居て

小国 さと子

小野寺 耿 秋

小野寺 みち子

小畑 光子

笠原 等

柏木 ともみ

柏原 日出子

柏原 眠 雨

加藤 昭

加藤 孝 治

加藤 百合子

鎌田 翠 萩

川原 友記子

菊池 ゆう子

緑蔭に命きらめく弥陀の池

麦秋や微熱の籠もる醪樽

抽んでることなく生きて草の花

囀りのリズムはみ出す一羽かな

酒好きの父でありけり墓洗ふ

コスモスの一輪ナースステーション

秋立つや笠郎女真野の原

物言はぬ地球ではなし年明くる

しらじらと海より明くる俊寛忌

雨過ぐやこのもかのもの蜘蛛の網

施設長も私服に着替へ芋煮会

日和下駄の足もと照らす庭花火

岩壁を打つ荒波や鑑真忌

秋暑し硯彫師の肩の胼胝

期日前投票を終へ秋しぐれ

黄落や帚目美しき校門前

山吹に触れ川舟の岸に着く

手に馴染む水となりたり北の春

樹木葬の墓所に蓄の若桜

骨の葉一錠飲んで厄日越す

一陽来復木洩れ日注ぐ手水鉢

雪催裂き織の帯飾りけり

病棟の窓を翺び交ふ百千鳥

琴柱のごとに鉄塔虎落笛

神鷄の斎庭に遊ぶ寒日和

遊印を押して春待つところかな

珈琲のラベルのままや辣韭漬

新薬を敷きたる途端牛の尿

木村 螢雪子

木村 ひろ美

木村 裕 一

幾世橋 廣

久保田 菊 香

熊 沢 れい子

黒 田 洋子

郷 内 不二子

幸 野 峰

国 分 恵美子

後 藤 秋 沙

後 藤 陽 子

小 林 里 子

小 林 宏 基

花合歡や伯母なきあとの伯母の家
 さざ波にすぐに消されて鴨の水尾
 昼過ぎの雨脚太き芒種かな
 炎天の白きにまかれ立ち止まる
 みくまりの瀬より涼しき風のくる
 陸前の海霧濃き日なり太宰の忌
 菓子皿の津軽馬鹿塗女正月
 啓蟄やおまじなひして下ろす靴
 湾またぐ橋その上を虹の橋
 秋晴や振つて絵筆の水を切り
 掃き寄せて火蛾の一夜の栄華なり
 積石にヒエラルキーや神の留守
 初つばめ復興の鐘かすめ飛ぶ
 花火消え新しき闇生れけり
 入学式の校歌に和する保護者席
 ペンパルを待つ東口昭和の日
 リハビリの積み木くづしや小六月
 廃校の机に残る春の泥
 東口から西口へ花吹雪
 蟬時雨バスにつき来る選挙カー
 歌垣に溢るる境内鳩盛る
 三角巾の手首いたはり針納
 みちのくに十年過ぎたり揚雲雀
 波音の砂に吸はるる十三夜
 黄心樹の花の香とどく雨のあと
 雑草の中十葉の白十字
 緊急地震速報春の眠り醒む
 地震はげし物落ちる音春の闇

小林 雅子
 小松 温美
 西條 弘子
 酒井 美代子
 寒河江 桑弓
 坂上 佐来良
 櫻井 京子
 佐々木 亀三男
 佐々木 三太郎
 佐々木 潤子
 佐藤 明子
 佐藤 あさ子
 佐藤 明日香
 佐藤 一竿

句碑の森近くて遠き残暑かな
 補聴器を外す安らぎ秋の宵
 初三十日便り絶えたる句友かな
 臥竜梅芽立ちの空を仰ぎけり
 古民家の厩からつぼ十三夜
 逆縁の親も老いたり墓洗ふ
 左義長へ田なかの道の真暗闇
 短剣のごと大皿の焼さんま
 春日和奉安殿跡線量計
 車いす汗と涙や金メダル
 牛の餌の草の束より蛭とぶ
 一房を挽げば日の洩れ葡萄園
 石頭揉みたる床屋あたたかし
 コロナ禍のこころ灯すや石露の花
 退院のこの世の坂のあたたかし
 夜明けより牡蠣剥きみんなみんなが母
 平和の世否と梟首回す
 ラグビー場高層ビルの底にあり
 母逝けり小壺に若葉挿せしまま
 明け方の流星を待つ息白し
 洗顔の水溢れたる原爆忌
 海鳴りはかの日の記憶門火焚く
 夜桜や花の童子の遊び来よ
 父の忌やもう綿虫の飛びしころ
 盆客の振る手だんだん遠くなる
 法窟の脱ぎしものかや朴落葉
 遺構なるホーム飛び交ふつばくらめ
 子の零れ話に沸いて星流る

佐藤 慶子
 佐藤 啓子
 佐藤 圭子
 佐藤 尚
 佐藤 拓郎
 佐藤 千枝
 佐藤 のびる
 佐藤 信昭
 佐藤 べん
 佐藤 真智子
 佐藤 みどり
 佐藤 綾泉
 眞田 しげみ
 佐野 享保

町内にふえし空地や猫じやらし
 老鷲やこの地に住みて五十年
 風船に余命三月の息こむる
 老眼鏡磨きて釣瓶落しかな
 夏酒のラベルの金魚瓶泳ぐ
 春の土足に弾力光踏む
 山畑を這ふ老二人遠郭公
 閉校の椅子に名前や文化の日
 鉄棒に干す児の蒲団地に触るる
 眼も鼻もなき案山子守る山田かな
 囀りや市民憲章黙読す
 湧き上がる河鹿の声の細さかな
 頰杖に歩む四五歩の草芳し
 頼朝の渡河の土橋や芒の芽
 広島を覆ふ怒りの夾竹桃
 パラリンピック台風海を渡りゆく
 山梔子の朽ちゆく日々のしづかなり
 句に向ふひとりの時間雪ばんば
 ゆるやかに窓の木もれ日夏どなり
 胃カメラを胃なしに入れる年の暮
 退院の妻の味なり胡瓜もみ
 牛の尾に肩を打たるる御慶かな
 更衣土の匂いの百姓着
 短日やふだん着ままの夕支度
 雄雉に赤き顔むけみつめらる
 冷房の窓開けしまま授業かな
 さよならと唇の言ふ窓に雪
 パーに置くだるまのポトル桜桃忌

塩沢 ゆたか
 篠沢 亜月
 柴田 和枝
 澁谷 としの
 島 明男
 島 貫悟
 清水 治男
 庄子 泰子
 白鳥 耕子
 鈴木 佳光
 鈴木 勝也
 鈴木 恵子
 鈴木 ヨシ子
 鈴木 わかば

こともなき夕暮れきざむ茗荷の子
 しんかんと消えし蜥蜴の先をふと
 みちのくの大寺に春惜しみけり
 みちのくの川波立つや女郎花
 靴底に世界遺産の春の泥
 モディリアニの裸婦像晒す曝書かな
 百一歳の強き婆の死十二月
 石打ちて鉄より火花早梅雨
 夫逝きてはや一周忌梅咲けり
 仏飯をたつぷりにして寒雀
 麦踏むや山の畑に牛の墓
 薄氷や尺一間の治山ダム
 朝市に活気みなぎり初つばめ
 雑木山ちから合はせて芽吹きけり
 築山の裾の暗さや杜鵑草
 若きらのほどに語らずちやんちやんこ
 わが胸の琴線ならせ秋の風
 花八手この家に住みて三十年
 エジプトの葦のフルート星涼し
 老優の厚き台本鷹渡る
 鶉鳴きて湖は雪野となりにけり
 山桜より明け初むる漁師町
 呼鈴啼る冷麦ちやうど冷える頃
 長命こそ孤独と知んぬ雪深々
 故郷より南に暮らし懐炉かな
 末黒野の匂ひ生者にまとひつく
 春鷗呼ぶ天金の詩集かな
 一足に足る革靴や憂国忌

関 三穂子
 平 公太郎
 高木 秀子
 高橋 健一
 高橋 洋子
 高平 悦子
 高宮 義治
 高村 龍彦
 田丸 満洲男
 田村 恵子
 為田 幸治
 千葉 卯
 辻田 慶子
 鶴岡 行馬

おごそかに年賀の礼を交しけり
 おもむろによそゆきの顔初鏡
 砂浜に覚えたての字日焼けの子
 震災を越え来し雄勝硯洗ふ
 春光の力貫ひし車椅子
 風を呼び風と戯むる芒原
 太棹を弾きうたふや雁供養
 種池に鉄魚飼はれてゐたりけり
 玉音を知る散髪屋敗戦日
 読初は恵存とある友の遺著
 出稼ぎの除染作業や鳥帰る
 今日生きることに十年町薄暑
 紅些と見せて開かず冬薔薇
 かさばつても軽き葉袋十二月
 終戦日絡繰時計動き出す
 一月の余白の多き手帳かな
 新しき古きも重ね萩散れり
 豊かなる流れゆたかなる春光
 硝子器の微かな曇り桜桃忌
 ペディキュアの色の様々踊る夏
 塩竈の夏や藻塩を買うてこそ
 禾は穂にことに判官最良の地
 車去り免許なき冬来たりけり
 エアコンにどよめき始む古曆
 初鴨を交せて不忍池暮るる
 後の月揉んでふくらす羽根枕
 魯迅故居更地となりてただ灼くる
 七夕の過ぐるや風のかはりたる

戸板京子

富田洋子

長倉徳之進

二本柳力彌

野家啓一

橋階美美子

長谷川麦雨

羽田絹枝

服部葉子

針金聖子

坂内佳禰

福田庄知

藤ユウ

富士勝子

ふりだしに戻ればいいさかたつむり
 耳年増らしき木耳ずつしりと
 耳搔の羽根のほわほわ寒に入る
 種茄子話に乗つてしまひけり
 春疾風いづれどこかでまた会はう
 七夕の願ひ時代の魁に
 青葙の切つ先さやに日を止む
 浚渫の濁り流るる翁の忌
 千本の花よみがへり花筏
 それぞれの鳥のかたちに雪晴るる
 人影も真白に消えし樹氷林
 牧閉ざす沢の水音残りけり
 寺町にタールの匂ひ秋暑し
 主張する供花の鶏頭雨の中
 空白の目立つ看板寒波来る
 夏椿蕎麦をすすればジャズ流れ
 下校子に寒九の雨の降り出しぬ
 鶏鳴の遠ちの小屋より春惜しむ
 町民課の電子証明クロッカス
 種茄子を割いて種とる庭かな
 碑は治水の祈り浮寝鳥
 ふところの小犬跳びだす雪の上
 住み馴れし六十余年寒牡丹
 水打ちて住所村から町となる
 大根の笑うてしまふ太さかな
 明日来るを疑はずして髪洗ふ
 通し鴨川幅広く使ひけり
 器変へ二日つづきの冷奴

藤崎幸子

伏見ひろし

文屋順

堀之内久子

本田幸逸

真壁澄子

檜尾麻衣

松井和子

松本眞澄

松本裕光

三浦克實

三品陽子

宮野かほる

宮村公子

母と子のあやとり橋の夕まぐれ
 一恙も生甲斐とせむ氷柱折る
 父の日や遺愛の竿の艶いまだ
 冬帽子抱いて白寿の母逝けり
 海の風金魚ねぶたの尾を揺らす
 色鳥やムーミンの絵の滑り台
 杉山の襷にけぶれる懸り藤
 冷房を肌へにエジプト木乃伊展
 大寒の漁火が闇深くせり
 もう陣を組むこともなき春の鴨
 枯野道遠くまたたく故郷の灯
 肩ならべ何かつぶやく卒業期
 よく見ゆる眼をもらふ雪だるま
 人日の舌噛みさうな花を買ふ
 この頃の身に堪へたる師走風
 連鎖外され信夫文知摺十二月
 遠花火幼きころの夜空かな
 朝刊と湯の沸く音と敗戦日
 月読の菱若水欲しき寒九なり
 眠らねば今日が終わらぬちろかな
 三月や眼下の海へ黙祷す
 冬ざれや霊屋に傾ぐ五輪塔
 コロナてふさみだるるもの持て余す
 顔埋めたし乳房のごとき白薔薇

諸岡孝子
 門間としゑ
 屋代ひろ子
 八巻義枝
 山崎正子
 山田昭子
 山田史子
 矢持義峰
 蓬田紀枝子
 渡辺柊子
 渡辺美知子
 渡辺通子

六 公益社団法人俳人協会

第三十二回東北俳句大会・岩手大会

公益社団法人俳人協会創立六十周年記念・第三十二回東北大会・岩手大会は、新型コロナウイルス感染症予防のため、参集方式を取り止め紙上俳句大会として実施された。

(宮城県選者 坂内 佳禰・小林 里子・高宮 義治)
 (受賞者は支部会員ののみ)

〈土井三乙・特選〉
 バケツ見せてもらへば底に梅雨鯨
 高宮 義治
 〈高宮義治・特選〉
 菜の花の明かりを残し島暮るる
 柏木 ともみ
 〈山崎雅葉・特選〉
 花の下セロ弾きゴーシユ来てあたり
 高宮 義治
 〈伊藤青砂・特選〉
 古書肆の煙草のほひ走り梅雨
 石川 喜美子
 〈鈴木正子・特選〉
 夏潮を統ぶる二十歳の漁師かな
 川原 友記子
 〈黒坂重政・特選〉
 速達の昭和の切手麦の秋
 伊藤 一男
 〈古市文子・特選〉
 浜豌豆打ち上げられし物錆ぶる
 加藤 百合子
 野馬追の先頭の旗九曜紋
 岡本 幸治
 〈小畑柚流・特選〉
 蚊遣火を四隅に巫女のまふ舞台
 高宮 義治

七 俳人協会宮城県支部賞

第十六回大崎市俳句大会

第十六回大崎市俳句大会は、新型コロナウイルス感染症拡大の現状に鑑み、席題による大会は中止とし、兼題のみの大会として十月に実施された。

(選者 坂内 佳禰・小林 里子)

やませ来る子捕ろの唄は今もなほ
 伊藤 一男

八 特別企画Ⅰ

私と俳句——「俳句整理学」

(公社)俳人協会評議員・「閨」代表 守屋明俊

「私と俳句」などという私的なことをお話ししてよいか迷いました。飽くまでも、若輩者の経験談としてお聴き頂ければと思います。

はじめに

俳句は村長さんとか、お医者様とか、町の名士とか、人格的にも立派な人、心にゆとりのある人が嗜む高邁な文芸。今でもそういうことを言う人がいます。高邁と言えば聞こえがいいですが、その裏で、俳句は浮世離れた文芸、市井を生きる庶民とは無縁の文芸というふうにも受け取られてきました。私が俳句を始めた頃に先人から、電車の中では俳句の本にカバーをして絶対人に見られないようにしていたというエピソードを聞かされました。高邁な文芸と讃えられる反面、蔑まれてきた面もあったたのでしよう。今でこそテレビのバラエティー番組の人気により「空前の俳句ブーム」と言われていますけれど俳句への理解がどれほど深まったかはよく判りません。「え？ お婆ちゃん俳句やってらっしゃるの？ いいご趣味ねえ」と、俳句に興味のない人の俳句観は相変わらずです。詩や小説には「いいご趣味ねえ」とはあまり言わないですね。

私が俳句を続けられているのは「俳句は浮世離れた文芸ではない。高潔な人間でもない私のような欠点だらけの人間でも俳句は出来る」と言いたいためなのかも知れません。人生が順風で心平らかな人たちへの一種の見栄ですね、これは。最近の若い方々は俳句に對し真摯に「自分はなぜ俳句を作るのか」というところまで掘り下げて議論していて非常に偉いと思いますが、私の句作の動機はそういう他愛もないことで、まことにお恥ずかしい限りです。

一 文芸との出会い

昭和二十五年十二月の生まれです。父母は長野県の伊那高遠という町の出身で、母は里帰りして私を産みました。大正九年生まれの父は農家の次男で、尋常小学校を卒業したのですがその頃は上に進む学費がなく進学できませんでした。いつの頃から東京へ出て下町の古い問屋さんで丁稚奉公をしていたと聞きます。戦後独立し浅草で小さな卸業を営んでいました。父の店は戦後の経済成長期に何回も倒産して、父も母も随分苦労したと思います。ですが戦後生まれの私は一回も飢えた経験がなく（今後は解りませんが）、大学まで進学させてもらえました。感謝以外の言葉が見つかりません。

転機は小学校の四年の秋。父が心機一転、隅田川を渡った先の業平橋というところに店を移転しました。今のスカイツリーのある辺り、古今亭志ん生も一時住んでいた下町です。そこで一家四人、二階の間が店で、その奥で間借りのような暮らしが始まったのです。そんな折りに出会ったのが石川啄木の短歌。貪るように『一握の砂』『悲しき玩具』や伝記を読みました。六年生のとき啄木の一生成原稿用紙八十枚ほどに纏め、その勢いで、中学のクラブ活動では国文研究部に入部し、短歌を作り始めました。初めて作った歌が

勉強をやっても悪いこの点に笑い顔にも涙が浮かぶ

といった拙いもので、入学後初めての中間試験の成績がクラス六十八人中五十七番だったのです。母が心配し直ぐにYMCAに通わされました。啄木調の三行の分ち書きの短歌はその後も大学ノートに綴られていきます。後日そのノートは不要品として母に捨てられてしまい、私の短歌は一首も残っていません。商家では「筆は一本、箸は二本」といって、暮しが優先。筆一本では生きていけない。文芸にのめり込むことは御法度でした。消えたノートに書かれた当時の歌の多くは生活の不安や思春期の苦悩を詠んだものであったろうと思います。勿論、父母の頑張りの御蔭で貧苦に喘ぐことは無かったのですから、多分に感傷的な甘い短歌であったに違いありません。

二 俳句との初めての出会い

中学・高校の六年間（昭和三十八年～四十三年）国文研究部に籍を置き、毎年夏休みにはクラブ顧問の石川一郎先生（古川柳研究会会員、のち校長）の引率で各地を訪ねました。宮沢賢治記念館、高村光太郎の高村山荘、川端康成の天城峠、京都では落柿舎、金沢、東尋坊など。クラブの先輩たちと高浜虚子の墓のある鎌倉寿福寺を訪ねたことも懐かしい思い出です。

ところで、俳句です。文化祭で俳句を短冊に書いて展示する企画が出ました。全員が俳句を作ることになりました。俳句は落柿舎を訪れたときに投句箱があり、石川先生から何でもいいから一句を作れと言われて困ったことがあります。それ以来です。でも何を詠むのか、どう詠むのかが全く解からず、啄木短歌一本鎗で来た私は戸惑いました。クラブの帰りに下級生から「守屋先輩、俳句はどう作ったらいいんですか？」と尋ねられても「まあ、思ったことをそ

のまま詠めばいいのでは」と答えるのが精一杯で、この問いには高齡となった今でも悩みます。何を詠むのか、どう詠むのか。永遠のテーマです。

三 昭和医専の水原秋櫻子

父が昭和四十七年の暮れに五十二歳で病死しました。就職が迫ってました。いろいろあって、医療系の昭和大学（戦前は昭和医専、戦後は昭和医大）に奉職します。そこで俳人の水原秋櫻子の名前を知りました。秋櫻子（本名、豊）は昭和医専の産婦人科学の初代教授で、昭和三年から永く学生教育と診療に携わり、斯界の発展に尽くされました。大学の創立五十周年記念事業の一つとして秋櫻子の句碑建立が企画され、秋櫻子ご染筆の色紙を複製し祝賀会で配ろうということになりました。募金係だった私が色紙の担当者に指名され、その時に初めて水原先生のお名前を知ったのです。先生の教え子である開業医の方々を介して記念の句を作って戴きました。（す、き野に大学舎成りぬあ、五十年 秋櫻子）。色紙に略歴を入れ畳紙に包み、祝賀会のご来賓にお配りしました。昭和五十三年のことです。当時は俳句に興味はありませんでしたが、秋櫻子の名は頭にインプットされたようです。

昭和六十一年に「未来図」の鍵和田柚子主宰に師事しその後平成十一年、四十八歳のとき編集長に就きました。その間に私は学内の企画部門に異動となり、そこで八年過ごします。時間が割とありましたが、史料室創設の仕事も兼務したので、急に思い立って水原先生のことを残そうと、学内の議事録をはじめ大学に残る戦前の史料を出来るだけ多く集め、在任中の先生の勤務状況やご功績を調べ、それを原稿に起こしました。秋櫻子研究の基礎資料になればいいと

考えたのです。そして平成十四年に『水原秋櫻子先生と昭和医専』というタイトルで大学から小冊子を出版しました。表紙には大学の中庭に建つ水原先生の「す、き野」の句碑の写真を飾りました。

昭和医学専門学校の創設者の一人である上條秀介博士は東京帝国大学を卒業後、大正の終り頃、帝大出身の医師が研究ばかりしていて戦地で何の役にも立たないという現状を憂いて、この際、優れた臨床医を育てられる専門学校を創設しようと提唱し、賛同者を広く募りました。同じ帝大の先輩にあたる水原先生にもお声を掛け準備委員会が発足。現在の東京都品川区旗の台に校舎が建てられました。昭和三年当時は一面すすき原で水はけが悪く、長靴で歩いてぬかるんだといひます。蛇が出たり夜中に梟が鳴いたり寂しい所だったとか。水原先生が大学にお寄せくだされた「す、き野に大学舎成りぬあ、五十年」には、その当時の思い出の一端が詠まれています。水原先生は教授として産科の診療科長として永く活躍されました。また、先生を慕って医専の学生たちが俳句同好会を作り、先生はその指導も行っていました。その間、昭和六年に高浜虚子の「ホトトギス」を離脱します。その決意を固めたのはご自宅から昭和医専の付属病院までの通勤途中だったに違いないと、私は勝手に憶測しています。

四 俳句事始め

俳句を作り始めたのは子どもを授かってから。三十代前半でした。句作の直接の切っ掛けは、今は元気に働いている次男が、産まれたあと直ぐ難病で入院したことからです。その頃はそこのいたたまれぬ気持ちをはかして表現したかった。それが俳句でした。私が十代で詠んだ短歌は啄木調で専ら生活の歌でしたので、その流れで俳句も

当初は境涯に近い句、自分を責めたり自嘲したり悲しんだり。五七五に纏めきれず、季語もよく知らず、初めから低迷していました。

しかし、或る日、薬学部長のS教授室に伺った折に、卓上の花瓶に綺麗な黄色い花が活けてあった。「先生、これは何という花なのですか？」と聞きましたら、なんだお前そんなことも知らないのかという顔をされて「連翹だよ」と一言。生薬学の教授だったのです。それからです、毎日通勤途中で発見した見知らぬ花を、帰宅してからカラー版の俳句大歳時記で確かめ始めたのは、何という名の花か、何という鳥か。それまで梅や桜、雀や燕くらいしか知らなかったのですから見るもの聞くもの全てが新鮮でした。俄然、楽しくなりました。職場での辛いことは俳句を作ることでも何と凌げましたし、俳句がうまく作れない時には仕事の方を何とか頑張りました。仕事と俳句は当時の私にとって両輪の輪でした。

「未来図」に入会する前後に読んだのが山本健吉の『現代俳句』と阿部督人の『俳句——四合目からの出発』。『現代俳句』からは俳句の鑑賞方法を、『四合目からの出発』からは、作ってはいけない俳句の類型・パターンを学んだと思います。特に後者の本では、母恋い俳句、孫俳句など句会で同情を誘うようなパターンの句が細かく分類されていて勉強になりました。そういう句だけは絶対作るまいと思ったのですが、最近母を亡くしそういう句もいなくなりました。

五 俳句の学び 鍵和田柚子先生

「未来図」の東京句会に初めて出た時に、長老の方から「草田男と楸邨と波郷を学べば大丈夫だよ」と声を掛けられました。いわゆる「人間探求派」と謂われた俳人達です。でも、鍵和田先生は少し違う言い方をされました。「先ず私の句集を読んでください。それ

から私の師であった草田男を読んでください。その次に楸邨、波郷を読んでください。それからもつと広く、いろいろの俳人の句を系統的に読むようにしなさい」と。大昔「自分の結社誌以外は読むな」という摩訶不思議な因習を持つ俳句結社もあったように聞いていましたのでこの発言には驚きました。あれは駄目これは駄目ということとで權威を保ってきた昔の宗匠たちとは違う道を先生は歩んできたのでしょうか。開明的で俳句というものを広く捉えていました。ですから私も人間探求派ではない俳人の俳句も読み、そこから多々学び自分の血肉となるよう努めてきたつもりですが、まだまだ勉強が足りません。

一方で、鍵和田先生からは「写生、写生」と言われ続けました。兎に角、物を見て、そして感じる。疎かに見るのではなく徹底的に角度を変えて見る。これは師系の中村草田男流です。机上で観念的に句を捏ね回すのではなく、知識で作るのではなく素の心で季語やモノを鷲掴みし、そこから自分のモチーフらしきものが浮かび上がったらしめたもの。あとはそれを表現し得る技術を磨くこと。技術は大切です。句会が大切なのはここにあります。自分の句が採られた採られなかったということだけで終るのは勿体ない。ほかの参加者、諸先輩の句を読めば色々深く学べますし、主宰のアドバイスは絶対です。選もとても大切です。

鍵和田先生には、初心の頃でしたが「守屋さんは見たものを直ぐに文字化するけれども、心に何かが湧くまでよく見ていなさい」と、たしなめられたことがあります。また句会では、「こういう句は句会に持つてくる以前の句です!」とか「この句は採りましたが一番最後に採った句です」とか。私が編集長に就いてからも何かの折りに「皆さんの投句作品の一句目がひどい句だったら、そのあとの句は読む気がしない」とか、いろいろ言って焚き付けるのです。そ

う言うことで若者にやる気を起こさせてくれたのでしよう。

鍵和田先生自身も若い頃に一度だけ、草田男に句稿の指導を仰いだとき「そんな俳句らしい俳句を作って何になるんですか?」と言われたそうです。つまり、一つの方向へ向けて綺麗に仕上がった、いわゆる俳句らしい一般的な句の作り方を草田男は窘めたのです。そのエピソードを自戒を籠めて我々に伝えてくれました。

もう一つ、鍵和田先生に感謝したいのは自分の俳句の方向性です。私は入門当初から未熟な自分を卑下していたものですから、先生の句のように正面に「我」を据え正々堂々と情感を籠めて句を作るのが苦手でした。どう作っても、自分を避けて、笑いとペーソスが滲み出る句が出来てしまう。それをご存知だったのでしよう、「あなたらしい句を作りなさい」と言ってくれました。誰もが詠む句より、真実があり個性がある句を詠む方向へ導いてくれたものと思っています。先生は「草田男の俳句は一代のもので、真似できるものではない」と、常々語っていましたので、鍵和田柚子俳句を弟子に押し付けはしませんでした。季語そのものを詠むのではなく季語を借りて自分を詠む、人間を詠む。自分の生きている証の俳句を作る。先生の方向性には確固たるものがあり、死ぬまでそれを貫き通しました。

六 俳句整理学

いよいよ今日の本題です。皆さんは毎年作られている俳句をどのように整理しているのでしょうか。よくあることですが、夜中に素晴らしい秀句が出来て、「やったあ!」と眠って、朝起きてみるとその句が見るも無残な駄句であった。そういうことを私は何度も経験しています。ラブレターも俳句も夜中は禁物です。読むに堪えません。

つまり、時間をおいて自分の句を冷静になって読み返すと、欠点がよく見えてくるということです。ですから、今度は一年間に作った自分の作品を、時間をおいて眺めてみるとどうでしょうか？ 句会に出した句、雑誌に投句した句、あるいはコンクールに応募した句。いろいろの句が句帳に記されていると思います。それをそのままにしていたら、それまでです。進歩がありません。もう一度、振り返り、自分の作品を一句一句チェックする。

私は平成二年から三十年余り、毎年、年が明けてから自分のための自家製の作品集を作っております。作品集と言ってもホチキス止めの簡単なものです。年間三千から四千近く作った俳句を見直してその中から残しておきたい句を三百句くらい自選します。自選に自信がない時は少し甘く採りますが、約十分の一は残し、十分の九は捨てることとなります。中学高校の六年間、実は自分の短歌を同じように毎年纏め、友人に勝手に配っていたその習慣を踏襲したわけです。昭和四十年頃からですから、まだ謄写版の時代。鉄筆でガリを切り謄写版で刷ってホチキスで止めた。俳句を始めて今度はガリ版ではなく、当時のワープロを使い、三百句ほどを画面上で打ち、一ページ五句に編集して、保存しプリントする。作品集のタイトルを決めそれを表紙に。奥付も作ってプリントします。それを中折りにしてホチキスで二箇所止める。現在はパソコンになりましたが、今もホチキス止めというのは進歩がありませんね。和綴じが得意であればそうしたのですが、どうも苦手でそのままになっています。

では、年間の自作の「振り返り」にどんな意義があるのでしょうか。

① 句会などで何人かの人に採って頂いた句、所属誌で共鳴して頂いた句を再確認できる。

② 句会などに投句した句で、全く点が入らなかった句を作り直すことができる。

③ 発表するのが躊躇われた句を見直すことができる。

①では、句会に出しっ放しにしていた自作にもう一度お日様を当てる。自信をもってこの句は残そうと思える句を確認します。俳人によつては、句帳の句の上にその句を採って下さった方の名前を残す方もいます。自分の信頼している方に採って頂いた句は残しましょう。

②では、思い入れのある句、「他の句は兎も角、この句だけは何とかしたい」と思う句を見つけたりメイクする。石田波郷のようなプロは上五の言葉がしっくりしない時は何日も時間を掛けて、決定的な言葉が浮かぶまで推敲したといわれています。執拗に推敲することをお勧めします。原句より少しでも良くなれば成功です。

③では、まだ誰の批評も受けていずそのままにしてある句。推敲してもその多くを捨てることになるかも知れませんが、推敲する価値があります。

以上の三点の振り返り（俳句の棚卸し）を行うことで、本当の駄作を未練なく捨てることができます。甘い選、緩い選でいいですから、三千句のうち三百句ほどは残しましょう。二千句なら二百句ほど。その作業を進める中で自選の力がより一層付いてくると思います。これも「振り返り」の成果です。

次に、句をどのように配列するか、それを考えるのも楽しいもの

です。編年体で編むのであれば、取り敢えず正月の句から順番に春夏秋冬の順番で並べてみる。これも季語の再確認ができて有益です。この作業中においても句を推敲することがあります。新たな句が生まれることもあります。自作をどのように配置するか。一句一句が自分の子どものように愛しく思える至福の時間です。

以上、俳句の整理についてお話をいたしました。楽しいのは、棚卸しで残った二百句〜三百句をその年の作品集として纏める作業です。先ずタイトルを決める。好きな句をタイトルにしてもいいです。発行日などを記す奥付も大切。刷り上った作品集の頁をめくると感慨も一入です。これら一連の作業が将来の句集出版に繋がってきます。

実はこの作品集が五年分溜まると、私は句集出版の準備に入ります。五年おきに句集を出していますが、何も準備していないところから句集を編むのは大変です、すでに自選してある作品集を活用するとスムーズに進めることができます。結局、三千句の五年分である一万五千句を整理し、最終的な句集に収められる句はせいぜい四百句。つまり、残りの一万四千六百句は捨ててしまう勘定になります。ただし、毎年の作品集には三百句ほど収めていますので、その年の自分や家族の様々な出来事やその年の自身の心の有りようなどは、作品集を繕えばすぐに思い出すことができます。

句集に収めた句が必ずしも優れているとは申せませんが、それを纏めた一連の振り返りは次の俳句生活を進めていく糧となる筈でしょう。大量に捨てた句があったからこそ今のこの四百句がある。そう思っただけはまた、性懲りもなく駄句を重ねていくことでしょう。

私的なことも含め取り留めのない話をいたしました。自作の振り返りは是非お試しく下さい。ありがとうございました。

守屋明俊先生のプロフィール

略歴

昭和二十五年十二月、長野県伊那高遠町生。東京浅草に育つ。

昭和六十一年 「未来図」入会、鍵和田柚子に師事。

平成三年 「未来図新人賞」受賞。

平成十一年 「未来図」編集長。

平成十四年 「未来図賞」受賞。

平成三十年 「未来図」編集長勇退。

令和元年 「未来図」同人会長。

令和二年 鍵和田柚子主宰逝去により「未来図」終刊、解散。

令和三年 「閨」創刊代表。

現在 「閨」代表、公益社団法人俳人協会評議員、日本文藝家協会会員。

句集

『西日家族』『蓬生』『日暮れ鳥』『自選守屋明俊句集』『象潟食堂』

自選十句

御降りや今年いかにと義父の間ふ

広げたる指すみずみに秋の風

雲が行く運動会で留守の村

川の字に寝て乾電池めく霜夜

水金地火木土天海冥石鹼玉

稲妻や笑ひの絶えぬ家ながら

もう蛾とか蝶とかを超え秋風に

ひさかたのひかり薨に飛梅に

富士山へ吹けば戻され石鹼玉

ビーフストロガノフと言へた爽やかに

『象潟食堂』

特別企画Ⅱ

鍵和田柚子の世界

再生の力としての俳句

(公社)俳人協会評議員・「秋麗」創刊主宰 藤 田 直 子

(一) 「すみれ束」の句をめぐる

令和四年の俳人協会のカレンダーの表紙は次の句だった。

すみれ束解くや光陰こぼれ落つ

淡いむらさき色が早春の莖を思わせ、上品で柔らかな雰囲気。二年前に逝去した鍵和田柚子の句である。のびやかな筆跡は生き生きとした生前の柚子を彷彿とさせた。

この句は昭和四十五年、柚子が三十八歳の春に詠んだ。当時、柚子は神奈川県の高立高校で国語教師をしていた。ある日、親しくしていた女性教師と駅まで歩いて帰ったとき、ふと今日が誕生日だと打ち明けた。するとその教師が花屋の店先の小さなすみれの束を買ってくれたという。帰宅してコップに挿そうと束を解いたとき、俄かに誕生日の感慨が湧いたのである。「こぼれたのは私の過去の月日であった」と自解している。塚本邦雄が毎日新聞の「けさひらく言葉」欄でこの句を採り上げ、「新しきは俳諧の花なりという『三冊子』の言葉は、この一句のために命を得る」と評した。

句の中に「光陰」という抽象的な語を入れること自体、作句のタ

プーを侵したと言えなくもない。しかし「歳月」ではなく、「光陰」と表現したことで、すみれ束が持つ光と陰を想像させる句になった。そこが強みであり、新しきであったと思う。

同じ年の春には次の句も詠んでいる。

三日月にのせる夢欲し苺盛る

啓蟄や指輪廻せば魔女のごと

いつも色鮮やかな洋服を着て明るい表情で、はきはきと話をした柚子。このような陽気な句が生まれるのも自然のことと思われる。だが、内面は決して明るいだけではなかった。前向きに生きるための発条として俳句を詠み続けたのである。

(二) 戦敗日と詠んだ十代

柚子は昭和七年、神奈川県秦野に生まれた。小学校三年生で平塚市に転居し、以後は平塚で育った。「柚子」は珍しい名だが本名で、旧姓は萩田柚子である。父の稔が禾偏の字が良いと思って探しているうちに、この字を発見した。普通の漢和辞典には無いが、最近ではパソコンでも出るようになった。「柚」の字は農作物が生い茂ることを意味する。

与謝野晶子や樋口一葉がそうであったように、柚子も幼い頃から本が大好きな少女だった。父は旧制中学の国語教師で、漢詩を作っており、母は短歌を嗜んでいた。家には古今東西の本がたくさんあり、もの心ついた頃から世界の名作や日本の名作を読んでいた。

十二歳の頃、戦時の色が濃くなり、灯火管制の中で、日記に俳句を書くようになったという。古いノートにそれが残されていた。

田のたにしことくくと鳴く春うらら、

土手かげの沼にとびかふ赤とんぼ

戦況が厳しくなった昭和二十年には、

警報がなつてる中に梅が咲く

春がすみパツと光った探照燈

防空壕に頻繁に入らねばならなくなり、袖子は本を持って入ったが、やがて鴨長明の『方丈記』だけを持って行くようになった。『方丈記』に流れているのは人生の無常である。「中学生でどのく

らい理解していたかは疑問だが、流れるような文章のリズムに惹かれていたのかもしれない」と袖子は振り返る。だが、平安末期の大火や飢饉に苦しむ人々の様子を読むことで、戦時の不安な心が慰められたのであろう。後年、このことを思い出して次の句を詠んでいる。

かの夏や壕で読みたる方丈記（平成六年作）

終戦前、平塚市は壊滅的な爆撃を受けた。昭和二十年の七月十六日、深夜から翌朝にかけて、B29の爆撃で平塚市は全滅した。当時、平塚には海軍火薬廠、日本国際航空工業等があったため、徹底的に襲撃されたのである。死者三百人以上、罹災者は三万人を超えた。幸い袖子一家は無事だった。母が身重で、「逃げたくない」と言ったため、家族で家に居た。それが幸いした。川の方に逃げた人たちはやられてしまったという。一夜にして焦土と化した平塚の凄惨な光景が十三歳の袖子の目に焼き付いた。終戦の日には次の句が残っている。

月指してからすつらなる戦敗日

半月になきくわびる戦敗夜

「敗戦」という言葉を知らなかったので、「戦敗」と詠んだという。日本にはそれまで「戦勝」はあっても、敗戦という語は無かったからである。ちょうどお盆の日で、先祖に申し訳ないという思いが「わびる」になった。

(三) 俳文学を研究

終戦後、通っていた県立平塚高等女学校は県立平塚江南高校となり、そこを卒業。昭和二十五年、お茶の水女子大学文教育学部に入學する。大学生になった袖子は能楽研究会を作り、謡曲を習い、能を鑑賞した。

この頃、惹かれていた俳句が二句あった。

雪はげし抱かれて息のつまりしこと 橋本多佳子

二十歳の女子大生の袖子は、俳句でこのように激しい恋も詠めるのかと驚き、多佳子に憧れた。後に、この句の「つまりし」は過去の回想を表現していて、多佳子は亡き夫との思い出を詠んでいたことを知った。そこに良さがあつたことに気づいたと語った。

焼跡に遺る三和土や手毬つく 中村草田男

焦土の中に三和土だけが残っている。そこで手毬をついている女の子。大人たちは敗戦で生きる氣力を失っていたが、無心に手毬をつく子どもには未来があつた。三和土と手毬と子だけを表現しているが、その背景にある戦、生きている子ども、未来への希望等が、手毬をつく音と共に伝わってくる。背景に思想があるこの句の深さに袖子は感動した。平塚の焦土を目の当たりにした袖子はこの句に救われたのである。

大学三年になり、俳文学を専攻することになった。萩原朔太郎の『郷愁の詩人と謝蕪村』に惹かれたことが理由の一つであつた。古臭いと思われがちな江戸期の俳句を、朔太郎が西洋の抒情詩のようだと読み解いている。目を覚まされる思いがしたと言う。卒論には蕪村を書きたかつたが、対象が大き過ぎるという教授の指導があり、蝶夢を選んだ。蝶夢については、父の友人の高木蒼梧が資料を多数集めていて、それを使うことが許された。蝶夢は江

戸中期から後期の俳人で、芭蕉の顕彰に尽力した人である。五年後、柚子はこの卒論を基に明治書院刊の『俳句講座』に「蝶夢論」を書いた。

俳文学の研究をするなら実作も学んだほうが良いと言われ、井本農一教授の紹介で村山古郷の「たちばな」に入会した。そこで初めて俳句の骨法を学んだ。しかし「たちばな」が二年程で廃刊になり、句友と共に金尾梅の門主宰の「季節」に入会する。

(四) 研究者から実作者へ

卒業後は、神奈川県立高校の教師となり、二年後に先輩教師の鍵和田務と結婚した。柚子の没後、務が柚子と出会った頃を振り返り、交際したくても最初は良い返事がもらえなかったが、そのうちにやっと付き合ってもらったと、初々しい思い出を披露した。務は京都大学の哲学科でカント哲学を専攻したが、工芸史の研究へと転換していた。教職の傍ら、家具における民俗学を提唱する研究者となつてゆく。昭和四十二年に東京の府中市に新居を建て、最晩年まで二人で睦まじくそこに暮らした。

さて、「季節」に投句しつづも、欲のない作句を続けていた柚子は三十代を前に、俳文学の研究をやめて俳句の実作に専念することを決意する。子どもを待ち望んでいたが叶えられないと思い始めた頃かと思われる。

身のどこか子を欲りつづけ青葉風

子を生さで空から手繰る烏瓜

胡桃一つ遂に聞かざる呱々の声

(五) 中村草田男の「萬緑」で学ぶ

柚子は思い切つて「季節」を退会し、「萬緑」に投句を始めた。昭和三十八年、三十一歳のことである。

草田男の〈空は太初の子妻より林檎受く〉も〈種蒔ける者の足あと洽しや〉も戦後間もないときの作である。廃墟の中で生きる力を見出す草田男の詩精神に勇気づけられた。柚子も若くして世の無常を思い知つたからこそ、この世の美しさを詠い上げたいという欲求に駆られたのであろう。

当時、「萬緑」では草田男が写生を提唱していたので、柚子も吟行の仲間に入れてもらい、写実的な詠み方を身につけていった。

朽ち葉深きに葦三つ四つ御殿跡

岩越えて還れぬ波や春日溜む

夏休みの長期休暇を利用して各地に旅をし、多作を心掛けた。

草田男の〈蟾蜍長子家去る由もなし〉〈母の日や大きな星がやや下位に〉等から、季語を象徴的に生かすことも学んだ。そして、季語を象徴的に働かせる句も、写生句と同様に、先ずは心を無にして対象に対峙し、己の胸奥から湧き上がるものを摺んでこそ成るのだと知った。

秋深し奥に問ひつつ小商ひ

富士隠す冬山ひとつ東歌

柚子は順調に成長し、昭和四十三年、萬緑新人賞を受賞。その折、草田男は柚子について、「文学教養の豊かさを、将来においては随時随所において実質的精華として発露してゆくようになるであろう」と評したが、その通りになってゆく。

昭和五十年萬緑賞を受賞。俳壇からも注目され、執筆等の仕事が増えたので、教職を辞し、俳句一筋に邁進することになった。

退職を機に出版した句集『未来図』が第一回俳人協会新人賞を受賞する。

未来図は直線多し早稲の花

民話読む庭のどこかに暮眠り

朝顔が日ごとに小さし父母訪はな

受賞後は新進気鋭の俳人として大いに活躍する。歳時記や事典の共著にも加わって忙しく過ごした。「俳句とエッセイ」誌に毎月十五句を発表することになると、提出する前に草田男の選を個人的に受けることができた。数か月作っているうちに、あまり苦勞せずに句を揃えることができたのだが、そのとき、草田男に「俳句らしい句を作ってどうするんですか」と言われたというエピソードが残っている。小手先で簡単に作ったような俳句に草田男が警告を鳴らしたのである。この経験を後年、何度も弟子たちに語った。

この時期、夫の仕事の関係でイギリスに数か月間滞在することもあった。

鳥渡る北を忘れし古磁石

流民となりて舌焼く唐辛子

(六) 「未来図」創刊

昭和五十六年、父が亡くなり、五十八年、草田男が亡くなった。

父恋ひの色の噴き出すかきつばた

炎天こそすなはち永遠の草田男忌

翌年、「未来図」を創刊した。乞われて教えていた教え子たちや同窓会関係の小さな句会が集まって百人程度の出発であった。創刊号には、「俳句は抒情詩の一つとして、作者の生（レーベン）の実

感を、作者自身のことばで、生き生きと表現すべきだと思います」と記した。「生の実感」を作句信条として表明したのである。

いにしへの田に蓬萌ゆ進むべし

登呂遺跡で詠んだこの句を創刊号に発表した。古代からの人々の営みに思いを寄せつつ、前進して行こうという決意の句である。

袖子は独自の世界を築き始めていた。以前に草田男が予見した通り、歴史や古典の時間軸に立ちつつ、己の存在を言葉で刻んで、確認して行くという姿勢を貫き始める。

夜御殿は永久の夜なるほととぎす

国褒めのことばきらきら黄落す

飛鳥大仏秋日は死力尽しけり

「未来図」は全国に支部を持ち、会員数は九百人を超える結社に発展した。会員は皆、袖子の知的で情の籠もった作品と大らかな人柄に惹かれていた。

袖子の選は緩いと言われた。あまり句を落とさないののである。「厳しくすると結局、同じような句を皆で量産するだけになってしまふから」という考えだった。季語は「どこかの歳時記に載っていればよい」、「内容によっては口語表現もあってよい」といった具合である。選の基準は「生き生きしているかどうかです」と言った。投句者が八百数十人だった頃、「この数なら、毎月、投句用紙を見ていると、その作者がどういう作り方をしているかが分かる。それによって選を変えている」と話した。例えば写真に徹している人の句は、写生が良いかどうかで判断し、境涯的な句を作っている人の句は、その意味で良いかどうかを判断する、という具合に、作者一人一人と向き合って評価した。

(七) 鴨立庵の庵主に

句集は『未来図』の後、『浮標』『飛鳥』と出し、著書も『季語深耕【祭】』他、入門書を次々に刊行した。

雷連れて白河越ゆる女かな

こゑ出して山姥に似る真葛原

第四句集『武蔵野』の句である。自然の中に踏み込んで詠まれてゐる。この流れから次の句も生まれた。

鶴啼くやわが身のこゑと思ふまで

冬になると数千羽の鶴が飛来する鹿児島県の出水で詠まれた。鶴の降り立つ田の畦に座って鶴の声を聞いていたとき、鶴はこれが己の声だと確信するまで啼き続けているのだと思つた。それは己の心の奥にあるものを探りつつ詠む俳句に通ずるものであつた。

第六句集『光陰』では西安や敦煌に旅をして次の句を得る。

生まざりし身を砂に刺し蜃気楼

敦煌から陽関に向かう砂漠で詠まれた。子を持たない身の存在は蜃気楼のように儚いという思ひである。

現身を離れゆくこゑ柚子の照り

己の発する声は肉体を離れて消えてゆくと詠む。どちらも無常観に裏打ちされている。

第八句集『胡蝶』で俳人協会賞を受賞する。大磯「鴨立庵」の庵主になり、西行と芭蕉の漂泊の系譜に繋がつたという感慨を抱いた。

庵主たり花の天蓋仰ぎつつ

円位忌の波の無限を見てをりぬ

さらに、同句集では沖繩の句が多い。

海から南風海から蝶や慰霊の日

炎熱や死者をさがして海に出づ

地上戦で犠牲になつた人々や南方で亡くなつた兵士たちを思い、句に詠むことは即ち鎮魂であつた。

その頃、京都市の日野にある鴨長明の庵跡を訪れている。柚子が愛読した『方丈記』が生まれた地である。

無常とて青々生ふる齒朶の群

「朝に死に、夕に生るゝならひ、たゞ水の泡にぞ似たりける。不知、生れ死ぬる人、何方より来たりて、何方へか去る」と綴つた鴨長明の心境に心を重ねた。柚子は無常観を抱きつつ、言葉から力を得て命あるものへの祈りを詠い続けた。

(八) 次世代に受け継がれる詩精神

第九句集『百年』では戦時を回顧しつつも、この世を美しいと詠み上げる。

紅睡蓮昭和の池の底知れぬ

被爆忌の蓮の蕾を握りしむ

鷺飛翔天空美しきこの世かな

この時期、百歳の母を送つた。

冬三日月黄泉路へ母の脚ほそき

第九句集『濤無限』には老いの意識と祈りの句が増える。あとがきに、東日本大震災の報道や写真を見聞すると、即座に太平洋戦争末期の敵機襲来による一望の焼土や瓦礫の光景が蘇ると書いた。

祈るほか無きか被災地春雪降る

あめつちに塔は千年飾り松

みほとけは禱りに瘦せて冬日影

紅梅のおづおづと咲き未知の老

この句集で毎日芸術賞を受賞した。

生涯の最終句集となった『火は禱り』は平成三十一年、八十七歳のときに刊行した。八十一歳から七年間の三九六句を収める。この句集で詩歌文学館賞を受賞した。体力が衰え始め、集大成の句集と予感したためか、来し方を振り返り、嘗て訪れた地などを詠んだ。少女期、戦時への回顧もある。

昭和とほし皿に音たて枇杷の種

戦時下の日記は一行からすうり

半月の見えぬ半分敗戦忌

蕪村読む白花たんぼぼ摘みてより

まとひつく雨後の熱気や沖繩忌

夏の月焦土の色は彼の世まで

スイートピー戦火くぐりし^は妣の花

句集名は次の句から取られた。

火は禱り阿蘇の末黒野はるけしや

平成二年に観た阿蘇の野焼を思い出している。野焼後の末黒野は袖子の中で、戦後の焦土の記憶と重なる。しかし野焼は害虫を防ぎ、植物の育成を促すために行われる。生命が再生することを願って放たれた火である。時空を超えて、野火は袖子の心の中で再生への禱りとなって燃えていた。次世代への禱りである。

未来あり澄むにいちづの冬泉

後世への伝言としてこの句を詠んだのではないだろうか。俳句という文芸に一生を懸けた袖子は無常観を抱きながらも、生命を讃歌することで生きる力を得た。冬の泉が絶えることなく湧き続けると詠み、詩歌の力が切り開く未来を象徴したのである。

令和二年六月十一日、自宅で八十八歳の生涯の幕を閉じた。

四か月後、『鍵和田袖子全句集』が刊行された。

略歴

藤田直子先生のプロフィール

昭和二十五年 東京都生れ

昭和四十七年 立教大学英米文学科卒業

昭和五十七年 鍵和田袖子に師事

昭和五十九年 「未来図」創刊時に入会

昭和六十三年 未来図新人賞受賞

平成十五年 未来図賞受賞

平成二十一年 「秋麗」創刊主宰

句集 『極楽鳥花』『秋麗』『麗日』『自註現代俳句シリーズ藤田直子集』

著書 『鍵和田袖子の百句』（日本詩歌句随筆評論大賞受賞）

現在 「秋麗」主宰・俳人協会評議員・日本文藝家協会会員・

国際俳句交流協会会員

代表句

恐竜の肋の抱く春の闇

扇子低く使ひぬ夫に女秘書

あたらしき湯の胸をさし久女の忌

秋麗の柩に凭れ眠りけり

水澄むや死にゆく者に開く扉

草に寝て背にかたきもの啄木忌

一舟に立ちてひとり白露かな

詩は祈り野に露の臺光るとき

山城は山に還りぬほととぎす

われの血の重さに蛭の離れたる

売りごゑのなき草市のをんなかな

『極楽鳥花』

『秋麗』

『秋麗』

『秋麗』

『秋麗』

『秋麗』

『麗日』

『麗日』

『麗日』

『麗日』

『麗日』以降

十五 事務局だより

疫病禍収束の見通しが立たないなか、支部の行事をどうするのか判断を迫られました。役員会の協議結果を踏まえ講演会と懇親会はすべて中止にしました。支部活動の主な意義は、皆様が一堂に会し交流することにあります。それが二年も続けて叶わず、通信句会だけになってしまいました。会員の安全のためであり、ご理解を頂きたいと思えます。

講演会は中止にしましたが、講演予定であった(公社)俳人協会の守屋明俊評議員及び藤田直子評議員には、原稿を執筆戴き、会報第39号の特別企画欄に掲載することが出来ました。両先生の多大なご協力に改めて厚く御礼を申し上げます。

令和四年開催予定の「(公社)俳人協会第33回東北俳句大会・宮城大会」も役員会での合意を得て、主催者の(公社)俳人協会のご了解のもとに、紙上俳句大会として実施することにしました。参集方式の大会の中止はスタッフはじめ皆様の健康を考慮してのことであり、ご理解をお願いします。

また、四年度には「支部創立40周年記念誌」を作成します。記念誌には全会員の作品掲載を考えていますので、作品の応募にご協力をお願いします。

本年度は6名の新たな会員を迎えることが出来ました。新入会員の皆様には支部の行事に積極的に参加されますよう期待しています。最後になりましたが、当支部にご指導とご支援を戴きました公益社団法人俳人協会の関係者の皆様に心より御礼を申し上げます。

事務局長 高宮 義治

編集後記

会報第三十九号をお届けします。新型コロナウイルス感染の収束の見通しが立たず、支部講演会と懇親会はすべて中止になるなど今年も活動が大幅に制限される中、皆様のご協力をいただいで無事発行の運びとなりましたこと、深謝申し上げます。とりわけ、講演予定であった守屋明俊先生には講演原稿を、藤田直子先生には執筆原稿を賜り、特別企画欄に掲載させていただきましたこと、厚く御礼申し上げます。

来年宮城県支部創立四十年を記念して、記念誌が発行されます。これに掲載するために、皆さんのこの十年の作品をまとめるようお願いすることになります。この時期は、東日本大震災後の復興の時期、また新型コロナウイルス感染症による自粛の時期に重なります。自作を振り返り、閉塞感の中でどう俳句と向き合ってきたかを確認する機会になりそうです。(篠沢 亜月)

令和三年度版 会報 第三十九号

発行日 令和四年五月二十八日

編集 俳人協会宮城県支部広報部

発行者 俳人協会宮城県支部

事務局 俳人協会宮城県支部事務局

〒九八九-1321 仙台市青葉区赤坂二-19-1

高宮義治方

電話 〇二二-1796-2826

印刷 株式会社東北プリント

〒九八〇-1082 仙台市青葉区立町二-124

電話 〇二二-263-1166